

歌人(54)	短歌 (375)
蒼井杏『瀬戸際レモン』（書肆侃侃房）	ぼつと雨、ではないものふってきて晴れときどきみじめだ、わたし
蒼井杏『瀬戸際レモン』（書肆侃侃房）	のみこんだ言葉がたてがみなびかせてレールの上をはしってゆきます
蒼井杏『瀬戸際レモン』（書肆侃侃房）	マヨネーズのふしゅーという溜息を星の口から聞いてしまった
天野慶『つぎの物語がはじまるまで』（六花書林）	バスタブでふやかしブラシでそぎ落すわたしの一部となった疲れを
天野慶『つぎの物語がはじまるまで』（六花書林）	たましいをお湯に溶かして浄化してまたヒトになり浴槽を出る
天野慶『つぎの物語がはじまるまで』（六花書林）	版の違うおんなじ本を買うひとその本みたいないひとになりたい
天野慶『つぎの物語がはじまるまで』（六花書林）	旅先を決めるときより貞剣に旅先で読む文庫を選ぶ
天野慶『つぎの物語がはじまるまで』（六花書林）	〈再読の際には押してください〉とリセットボタン付きのミステリ
天野慶『つぎの物語がはじまるまで』（六花書林）	げんじつとものがたりとの境界線ゆらぎはじめる図書室の隅
天野慶『つぎの物語がはじまるまで』（六花書林）	図書館は活字の呼吸で満たされて司書が無口になってゆくわけ
天野慶『つぎの物語がはじまるまで』（六花書林）	痕跡はすべてきれいにぬぐわれて 新古書はいつも涼しい顔で
天野慶『つぎの物語がはじまるまで』（六花書林）	結末を知ってしまったミステリを甘味の少ない果実のように
天野慶『つぎの物語がはじまるまで』（六花書林）	「すえながく、しあわせにくらしましたとき」で終わるおとぎばなしになれるように
天野慶『つぎの物語がはじまるまで』（六花書林）	今はもう消滅している星たちに照らされている/守られている
天野慶『つぎの物語がはじまるまで』（六花書林）	今晚も月を見上げるクレーターだらけの胸を抱えてひとは
五十子尚夏『The Moon Also Rises』（書肆侃侃房）	真夜中に鏡面となる湖は誰かを想うたび星を吸う
伊藤紺『気がする朝』（ナナロク社）	好きな人の好きな曲ださくても聴く 「ださ」 と思いながら 何度も
伊藤紺『気がする朝』（ナナロク社）	叶わないことがたくさんあったって 別に不幸ではないと思った
伊藤紺『肌に流れる透明な気持ち』（短歌研究社）	満ちている時に会いたい君が好き 満ちしてくれる人よりずっと
伊藤紺『肌に流れる透明な気持ち』（短歌研究社）	きみに会うときのわたしが好きなのに あなたらしくとか言わないで
伊藤紺『肌に流れる透明な気持ち』（短歌研究社）	あなたの好きな本を読むときは 一言一句にあなたがいるなあ
井上法子『永遠でないほうの火』（書肆侃侃房）	寝惑いの午後の読書よ初恋のひとの御顔を思い出せない
井上法子『永遠でないほうの火』（書肆侃侃房）	ほっとした。影にも夜は訪れてくれる数多の灯をひきつれて
今橋愛『O脚の膝』（書肆侃侃房）	たくさんのおんなのひとがいるなかで わたしをみつめてくれてありがとう
今橋愛『O脚の膝』（書肆侃侃房）	エアコンを春ただなかに整えて 結婚したら本を読みたい
今橋愛『O脚の膝』（書肆侃侃房）	本買って少し気分が晴れました 副詞にひかりをあてる本です
上坂あゆ美『老人ホームで死ぬほどモテたい』（書肆侃侃房）	お好み焼きの大きい方をくれたこと地球ではこれを愛とか言うよ
上坂あゆ美『老人ホームで死ぬほどモテたい』（書肆侃侃房）	これみんなつままないって言うんだけどわたしが好きならきっと好きだよ
上坂あゆ美『老人ホームで死ぬほどモテたい』（書肆侃侃房）	大体はタンパク質と水なのにどうして君が好きなんだろう
上坂あゆ美『老人ホームで死ぬほどモテたい』（書肆侃侃房）	言わなければよかったことが多すぎてジャンプノズルをかすかと押す
上坂あゆ美『老人ホームで死ぬほどモテたい』（書肆侃侃房）	懸命に生きてる 丁寧じゃないけど払っているよ国民年金
上坂あゆ美『老人ホームで死ぬほどモテたい』（書肆侃侃房）	ひび割れた世の中だけど君だけはいつでもつやつやしてほしい
上坂あゆ美『老人ホームで死ぬほどモテたい』（書肆侃侃房）	持て余した愛を詰め込むミュージックプレイリストに確かな生き様
上坂あゆ美『老人ホームで死ぬほどモテたい』（書肆侃侃房）	感覚的な人になりたいくまず辞書でかんかくてきを引いている夜
上坂あゆ美『老人ホームで死ぬほどモテたい』（書肆侃侃房）	眠れない夜には辞書を吸ぎな、ほら だいじょばないけどだいじょうぶだよ
上坂あゆ美『老人ホームで死ぬほどモテたい』（書肆侃侃房）	千切られたボン・デ・リングが惑星となって回りだす 始発が近づく
岡崎裕美子『発芽/わたくしが樹木であれば』（青磁社）	ワンピースを畳んでくれたそれだけで二人暮らしはなんかうれしい
岡崎裕美子『発芽/わたくしが樹木であれば』（青磁社）	降ってきたよと言いながら窓を閉めてゆく 急にふたりの部屋になりゆく
岡崎裕美子『発芽/わたくしが樹木であれば』（青磁社）	欠けてゆく月を見ている「見ている？」ときみにメールを打ちながら見る
岡本真帆『あかるい花束』（ナナロク社）	旅と犬おなじ様にかけているほんとうに大切にしたいから
岡本真帆『あかるい花束』（ナナロク社）	恋人のいないわたしを生きていくその軽やかさ、心許なさ
岡本真帆『あかるい花束』（ナナロク社）	乱丁のある文庫本抱きしめる 愛すまたったひとつの傷を
岡本真帆『あかるい花束』（ナナロク社）	物語から顔を上げ歩くととき人差し指は葉のかわり
岡本真帆『あかるい花束』（ナナロク社）	そうかこんなに、こんなにひとりで生きるのは ビルに追い詰められている月
岡本真帆『あかるい花束』（ナナロク社）	言の葉は風のように渦巻いてその外側の夜の静けさ
岡本真帆『あかるい花束』（ナナロク社）	いつか観た映画を深夜流すときあの日のきみが座る 隣に
岡本真帆『水上バス浅草行き』（ナナロク社）	ありえないくらい眩しく笑うから好きのかわりに夏だと言った
岡本真帆『水上バス浅草行き』（ナナロク社）	全員に好かれなくてもいいと思う きみのほくらがよくなって笑う
岡本真帆『水上バス浅草行き』（ナナロク社）	好きな服でお出かけをするガラスというガラスに背筋を伸ばして映る
岡本真帆『水上バス浅草行き』（ナナロク社）	ていねいなくらしにすがりつくように、私は鎖に昆布を入れる
岡本真帆『水上バス浅草行き』（ナナロク社）	こぼれてくものあまりに多すぎて抱きしめていい犬をください
岡本真帆『水上バス浅草行き』（ナナロク社）	平日の明るいうちからビール飲む ごらんよビールこれが夏だよ
岡本真帆『水上バス浅草行き』（ナナロク社）	当社比で顔がいい日だ当社比で顔がいい日に限って豪雨
岡本真帆『水上バス浅草行き』（ナナロク社）	ここにいるあたにかい犬 もういい犬 いないけどいつづける犬
岡本真帆『水上バス浅草行き』（ナナロク社）	パスワードの中に犬の名をませて打ち込むたびに君に会いたい
岡本真帆『水上バス浅草行き』（ナナロク社）	思い切りダブルロールを抱きしめて私の夜を私が歩く
岡本真帆『水上バス浅草行き』（ナナロク社）	自分にも飼いたい動物を抱きしめて寝るような孤独だ
木下龍也、岡野大嗣『玄關の覗き穴から差してくる光のように生まれたはずだ』（ナナロク社）	老犬を抱えて帰るいつか思い出す重さになると思いながら （岡野大嗣）
木下龍也、岡野大嗣『玄關の覗き穴から差してくる光のように生まれたはずだ』（ナナロク社）	目のまえを過ぎゆく人のそれぞれに続きがあることのおそろしさ （岡野大嗣）
木下龍也、岡野大嗣『玄關の覗き穴から差してくる光のように生まれたはずだ』（ナナロク社）	冷えた印刷をうれしくにおうとき本屋に夏の入り口はある （岡野大嗣）
岡野大嗣『サイレンと罎』（書肆侃侃房）	散髪の帰りの道で会う風が風のなかではいちばん好きだ
岡野大嗣『サイレンと罎』（書肆侃侃房）	ひとしれず磨り減ってゆく靴底のおかげで靴は靴でいられる
岡野大嗣『サイレンと罎』（書肆侃侃房）	においから先に世界に立ちこめてそれから雨が降るときは夜
岡野大嗣『たやすみなさい』（書肆侃侃房）	すきな原曲のカバーがいいときのしっぽがあればふりたい気持ち
岡野大嗣『たやすみなさい』（書肆侃侃房）	好きだった曲を好きなまま歳とっておんなじ歌詞になんでも泣く
岡野大嗣『たやすみなさい』（書肆侃侃房）	爪を切る音に安心できるから伸びる時間をまた生きました
岡野大嗣『たやすみなさい』（書肆侃侃房）	ぼろぼろのからだをひきずってあしたまたぼろぼろになるためにねる
岡野大嗣『たやすみなさい』（書肆侃侃房）	二回目で気づく仕事のある映画みたいに一回目を生きたいよ
岡野大嗣『たやすみなさい』（書肆侃侃房）	歌詞わからないまま好きな洋楽のそういう良きの暮らしをしたい
岡野大嗣『たやすみなさい』（書肆侃侃房）	もう一軒寄りたい本屋さんがあってちょっと歩くやけどいいかな
岡野大嗣『たやすみなさい』（書肆侃侃房）	もう何もないうけど文庫本の残りページの薄さを撫でる
岡野大嗣『たやすみなさい』（書肆侃侃房）	好きな作家の新刊をお気に入りの本屋へお気に入りのサンダルで
岡野大嗣『たやすみなさい』（書肆侃侃房）	発売日の漫画を買って帰りたいこの先どんな歳を生きても
岡野大嗣『たやすみなさい』（書肆侃侃房）	駅前に本屋があるということの概念をわれわれは愛そう
岡野大嗣『たやすみなさい』（書肆侃侃房）	こんなとき力になってあげたいのに布団のなかで思うしかない
岡野大嗣『たやすみなさい』（書肆侃侃房）	ぼくの聴く音楽こそが素晴らしいと思いながら歩く夜が好きだよ
岡野大嗣『たやすみなさい』（書肆侃侃房）	イヤフォンをゆるくはめなおして風が歌いだすなら楽しい夜だ
岡野大嗣『音楽』（ナナロク社）	きみが好きだったシーンを語るのを映画の続きみたいにみてる
岡野大嗣『音楽』（ナナロク社）	まだ寝てる頭でまだ寝てる犬をながめるたぶん無償の愛で
岡野大嗣『音楽』（ナナロク社）	人ごみ、と言いたくないというきみと多くの人のなかで手をつなぐ
岡野大嗣『音楽』（ナナロク社）	つらいね、のいいねをつける これしきのことで救った気になって消す
岡野大嗣『音楽』（ナナロク社）	さみしがるひとの気持ちをわからないときわかれるときよりもさみしい
岡野大嗣『音楽』（ナナロク社）	いつかすっかりしぼんだ背中をさするだろう子犬のときから知っている手で
岡野大嗣『音楽』（ナナロク社）	気の利いた言葉がうまく出てこない気の利かないのすら出てこない
岡野大嗣『音楽』（ナナロク社）	泣いてしまった漫画を閉じるとき本のこんな軽くて泣いてしまった

岡野大嗣『音楽』（ナナロク社）	海にまであなたは本を連れてきて海を眺めるように愛する
岡野大嗣『音楽』（ナナロク社）	最終巻が少しだけ厚いそのぶんを泣き出す手前のまま読み進む
岡野大嗣『音楽』（ナナロク社）	隣り合わせで本を読むきみのひらく漫画に雪が降っている午後
岡野大嗣『音楽』（ナナロク社）	気を抜くと誰もを嫌いになりそうな夜 抱きとめて犬と震える
岡野大嗣『音楽』（ナナロク社）	地下鉄の窓があいてる夜なのに夜みたいだと思ってしまう
岡野大嗣『音楽』（ナナロク社）	音楽がしんどい夜に聴けていてこれは点滴かもしれない
岡野大嗣『音楽』（ナナロク社）	きびしきさびしくなきの顔をしてゆぶねにひそんでたりますのです
岡野大嗣『うれしい近況』（太田出版）	裾がいい服を着ていく今日たぶん俯きがちなわたしのために
岸原さや『声、あるいは音のような』（書肆侃侃房）	生きている、大人のふりで適切な判断なんてものをしながら
岸原さや『声、あるいは音のような』（書肆侃侃房）	しずかだね時の濁りが澄んでゆく葉は本にはさんだままで
岸原さや『声、あるいは音のような』（書肆侃侃房）	読みさしの文庫をひらくゆびさきに葉がふれる羽のかたちの
岸原さや『声、あるいは音のような』（書肆侃侃房）	死ぬことと生きていることの境いめが目にしみる夜は横むきに寝る
木下龍也、岡野大嗣『玄関の覗き穴から差してくる光のように生まれたはずだ』（ナナロク社）	邦題になるとき消えたTHEのような何かがぼくの日々に足りない（木下龍也）
木下龍也、岡野大嗣『玄関の覗き穴から差してくる光のように生まれたはずだ』（ナナロク社）	詩集から顔を上げれば息継ぎのようにぼくらの生活がある（木下龍也）
木下龍也『つむじ風、ここにあります』（書肆侃侃房）	レシートも袋もカバーもいりませんおつりもいいです愛をください
木下龍也『つむじ風、ここにあります』（書肆侃侃房）	かなしみはいたるところに落ちていて歩けば泣いてしまう日もある
木下龍也『つむじ風、ここにあります』（書肆侃侃房）	仰向けに寝て新刊を開いたら僕の顔に葉が刺さる
木下龍也『つむじ風、ここにあります』（書肆侃侃房）	仰向けで本を支える両腕で僕を支えるための寝返り
木下龍也『つむじ風、ここにあります』（書肆侃侃房）	おすすめの本を聞かれておすすめの本と検索窓に打ち込む
木下龍也『つむじ風、ここにあります』（書肆侃侃房）	小説のように場面は変わらないだからぼくらは扉をめくる
木下龍也『きみを嫌いな奴はクズだよ』（書肆侃侃房）	好きだって言うより先に抱きしめた 言葉はいつも少し遅れる
木下龍也『きみを嫌いな奴はクズだよ』（書肆侃侃房）	ここにいてここにはいない読書家をここに進行するためのキス
木下龍也『オールアラウンドユー』（ナナロク社）	こころっていつもからだについてきて歩行の邪魔をするからきらい
木下龍也『オールアラウンドユー』（ナナロク社）	かなしみは洗練されてゆくだろう胸にしめる鈴のサイズに
木下龍也『オールアラウンドユー』（ナナロク社）	詩の神に所在を問えばねむそうに答えるAll around you
木下龍也『オールアラウンドユー』（ナナロク社）	空席がすばやく埋まる東京でだれが消えたか思い出せない
木下龍也『オールアラウンドユー』（ナナロク社）	まわれ右してかなしみを背景にすれば拍手のなかの幕開け
木下龍也『オールアラウンドユー』（ナナロク社）	生きてみることが答えになるような問いを抱えて生きていこうね
木下龍也『オールアラウンドユー』（ナナロク社）	生きなくちゃ 会う約束をしたために暗に生まれる会わない日々を
木下龍也『オールアラウンドユー』（ナナロク社）	かなしみは根絶やしにしたはずなのにいっぽん生えていて群れとなる
木下龍也『オールアラウンドユー』（ナナロク社）	風だけが似ている街でGoogleに本屋の場所を教えてもらう
木下龍也『オールアラウンドユー』（ナナロク社）	目を上下上下上下と動かして百年前の詩をうすくむく
木下龍也『オールアラウンドユー』（ナナロク社）	読み終えてややふつくらとした本にあなたの日々が挟まれている
木下龍也『オールアラウンドユー』（ナナロク社）	ねむれないおまえのためにできるのは灯りをひとつひとつ消すこと
木下龍也『オールアラウンドユー』（ナナロク社）	またわたしだけが残った、そう言って花瓶は夜の空気を抱いた
木下龍也『オールアラウンドユー』（ナナロク社）	生と死が地続きである月の夜に川はやさしい目隠しをする
木下龍也『オールアラウンドユー』（ナナロク社）	手をつなぐ影のどこまでぼくなのかわからないまま夜にとけたい
木下龍也『オールアラウンドユー』（ナナロク社）	昔より優しくなった死にたさに「どうしたんだ？」と問いかける夜
木下佑介『君が走っていったんだろう』（書肆侃侃房）	好きでしたですがでしただになるまでの日々をあなたに聞いてほしいな
木下佑介『君が走っていったんだろう』（書肆侃侃房）	図書館で閉じられていく本たちと、握られなかった手と手の温度
木下佑介『君が走っていったんだろう』（書肆侃侃房）	積み上げた本は崩れて、紫陽花が咲いてる方の道をえらんで、
北山あさひ『ヒューマン・ライツ』（左右社）	地下鉄の窓開いていてときどきは風を潰してページをめくる
鯨井可楽子『タンジブル』（書肆侃侃房）	風吹かばいよいよ月は澄むばかり静かなる夜 鳴れよ携帯
小坂井大輔『平和園に帰ろうよ』（書肆侃侃房）	もうダメだと思った時に読む本が平積みされてる日本の屋
小島なお『乱反射』（書肆侃侃房）	ひとりとみた夕焼けきれすぎたから今日はメールを見ないで眠る
小島なお『乱反射』（書肆侃侃房）	何ひとつ知りすぎたことないままにわれは二十歳になつてしまいいぬ
小島なお『乱反射』（書肆侃侃房）	誰か弾く夜のギターに非常ドア鈍く共鳴している屋上
小島ゆかり『サイレントニャー』（短歌研究社）	君の好きな鯛玉でまた遊ぼうよそんなに早く老いないで、猫よ
小島ゆかり『サイレントニャー』（短歌研究社）	声になる前のしんと深いこえ 孤独な夜のサイレントニャー
小島ゆかり『サイレントニャー』（短歌研究社）	猫よりも猫の気配がさきに来る ひとひとひとと夜が微動す
小島ゆかり『サイレントニャー』（短歌研究社）	ねむりいるからだの上に猫が来てひとつながりの闇となりたる
小島ゆかり『サイレントニャー』（短歌研究社）	この夜のこころ弱って飼主は「幸せかい」と猫に問いかく
小島ゆかり『サイレントニャー』（短歌研究社）	いなくとも君はいるから聞こえるよ 孤独な夜のサイレントニャー
笹井宏之『てんとろり』（書肆侃侃房）	生きてゆく 返されないうたくさんの恩を鞆につめて きちんと
笹井宏之『てんとろり』（書肆侃侃房）	ひきつづき私は私であるでしょう ところによりあなたをともなって
笹井宏之『てんとろり』（書肆侃侃房）	きれいごとばかりの道へとりつく私でいいと思ってしまう
笹井宏之『てんとろり』（書肆侃侃房）	すばらしい、の 大安売りがやっていて今日はとりわけすばらしいのだ
笹井宏之『てんとろり』（書肆侃侃房）	寂しさでつくられている本棚に人の死なない小説を置く
笹井宏之『てんとろり』（書肆侃侃房）	雨のことばかりがのっている辞書を六月のひなたに置いてみる
笹井宏之『てんとろり』（書肆侃侃房）	本棚に戻されたなら本としてあらゆるゆびを待つのでしょうか
笹井宏之『てんとろり』（書肆侃侃房）	こころにも手や足がありねむるまえしずかに屈伸運動をする
笹井宏之『てんとろり』（書肆侃侃房）	風。そしてあなたがねむる数万の夜へわたしはシーツをかける
笹井宏之『ひとさらい』（書肆侃侃房）	ばらばらですぎなものばかりありすぎてあいつそげんごみこんでしまいたい
笹井宏之『八月のフルート奏者』（書肆侃侃房）	わがうちに散る桜あり 君の名を呼ぶとき君はきききらと風
笹井宏之『八月のフルート奏者』（書肆侃侃房）	愛用の鞆に付きし折り目より物語一行零れている
笹井宏之『八月のフルート奏者』（書肆侃侃房）	幸せでいいですかと問う君の横ほら幸せが顔いている
笹井宏之『八月のフルート奏者』（書肆侃侃房）	日本語が熟れてゆきます うすあかりする古書店の春の詩集
笹井宏之『八月のフルート奏者』（書肆侃侃房）	緩やかに星繁がつてゆく空に銀河鉄道の汽笛が鳴る
笹井宏之『八月のフルート奏者』（書肆侃侃房）	携帯のカメラでは上手く撮れぬからメールに書いた「夜空を見なよ」
笹川諒『眠りの市場にて』（書肆侃侃房）	猫の髭を一本拾いしばらくは言葉が生まれてくるのを待った
笹川諒『眠りの市場にて』（書肆侃侃房）	どの本を鞆に入れて会いにゆくべきだろう硝子窓に似たひと
笹川諒『眠りの市場にて』（書肆侃侃房）	とてもまぶしい再読みたいな世界とか、そんな所へ行きたいけれど
笹川諒『眠りの市場にて』（書肆侃侃房）	夕暮の花に気分を似せているあなたに無理に読ませたい本
笹川諒『眠りの市場にて』（書肆侃侃房）	ころにはいったいいくつ筋肉があるか数えて夜の岸まで
柴田葵『母の愛、僕のラブ』（書肆侃侃房）	水を買うその違和感で日々を買うわたしの好きなおにぎりはずな
杉崎恒夫『パン屋のパンセ』（六花書林）	「愛」を強制終了します。データはすべて失われます。
杉崎恒夫『パン屋のパンセ』（六花書林）	どうしても消去できない悲しみの隠しファイルが一個あります
杉崎恒夫『パン屋のパンセ』（六花書林）	一晩じゅう半分の月が半分の見えない月を曳きずっている
杉崎恒夫『パン屋のパンセ』（六花書林）	三月の雪ふる夜にだす手紙ポストのなかは温かいですか
鈴木晴香『夜にあやまってくれ』（書肆侃侃房）	花を買うことに理由がないように恋を束ねて片腕に抱く
鈴木晴香『心がめあて』（左右社）	言葉では足りないと言って抱きしめるそれでも足りないから声になる
鈴木晴香『心がめあて』（左右社）	会いたきは会っても消えてゆかなくて傘を差しても少しは濡れる
鈴木晴香『心がめあて』（左右社）	思い出は増えるというより重くなってどのドアもどの鍵でも開く
鈴木晴香『心がめあて』（左右社）	どちらかが返信しないで終えるしかない毎日の果てに吐く息
鈴木晴香『心がめあて』（左右社）	君が寝るところを偶然見てしまうもつとわたしに油断していて
鈴木晴香『心がめあて』（左右社）	小説を抱いたままで眠り込む白鳥に胸に乗せるかたちで

鈴木晴香『心がめあて』（左右社）	太陽のひかりの下で読む本に星空、それもひどく眩しい
鈴木晴香『心がめあて』（左右社）	どのページから読み始めてもいいしどこで読み終えてもかまわない
鈴木晴香『心がめあて』（左右社）	きみの本借りれば君の匂いしてどうしよう人は冬へ逃れる
鈴木晴香『心がめあて』（左右社）	眠ってたことに気がつくのはいつも目が覚めてから ひかりのなかで
鈴木晴香『心がめあて』（左右社）	落花生崩れるように君のいた夜が指先から零れだす
鈴木晴香『心がめあて』（左右社）	見えなくてそれでもそこにあるものを探しに夜の地平線まで
染野太朗『初恋』（書肆侃侃房）	ひととみて自分ばかりを知る夜の風をあやつるやうにくるしい
田中ましろ『かたすみさがし』（書肆侃侃房）	ひとすじの雨になりたいまっすぐにあなたに落ちていくための
田中ましろ『かたすみさがし』（書肆侃侃房）	ストライク投げても受け止めないくせにミットかまえて「恋」なんて言う
田中ましろ『かたすみさがし』（書肆侃侃房）	せかいて言えばなんだか広すぎてあなたと言えは輝きすぎる
田中ましろ『かたすみさがし』（書肆侃侃房）	誰ひとり降りない駅のホームにも誰かのためのひかりは灯る
田丸まひる『硝子のボレット』（書肆侃侃房）	はじめからあとがきを読むような恋 図書館に寄るからも帰る
田丸まひる『硝子のボレット』（書肆侃侃房）	さびしさをめくってほしいかなしみをはがしてみたい上澄みだけ、でも
田丸まひる『硝子のボレット』（書肆侃侃房）	読みさしの本の葉を抜くような夜を重ねてばかりでごめん
俵万智『チョコレート革命』（河出書房新社）	海底で指をつなげばあなたしか見えなくなった南半球
俵万智『チョコレート革命』（河出書房新社）	簡潔に君が足りぬと思う夜 愛とか時間とかではなくて
千種創一『千夜曳糞』（青磁社）	人生が何度あっても間違えてあなたに出会う土手や港で
千種創一『千夜曳糞』（青磁社）	愛という言葉を避けるふたりとも何が愛だかわからないから
千種創一『千夜曳糞』（青磁社）	すすきほを秋のしっぽと思うとき何万という秋ひるがえる
千種創一『千夜曳糞』（青磁社）	春雨のスープをあなたは混ぜているゆっくり銀河を創るみたいに
千種創一『千夜曳糞』（青磁社）	思い出に厚みはあって、たとえば、深夜のだし巻き卵とか
千種創一『千夜曳糞』（青磁社）	夏の夜の底だね、ここは、鉄欄を指でしゃららと鳴らしつつゆく
寺井奈緒美『アーのようなカー』（書肆侃侃房）	ぼくたちの関係に名を付けるなら無題と付けて大事にしよう
寺井奈緒美『アーのようなカー』（書肆侃侃房）	えのき茸のように付箋の生えた本発光している本棚の奥
寺井奈緒美『アーのようなカー』（書肆侃侃房）	朝顔は夜の気配が恋しくてクーとお辞儀をする屋下がり
寺井奈緒美『アーのようなカー』（書肆侃侃房）	改札のいちばん最後の人として出てくるきみは夜を引き連れ
寺井奈緒美『アーのようなカー』（書肆侃侃房）	終電を運転し終えた駅員が寂しくないよう待っている月
堂園昌彦『やがて秋茄子へと到る』（港の人）	手のひらに僕とあなたの涙粒混ぜて乾かす間の四季よ
堂園昌彦『やがて秋茄子へと到る』（港の人）	僕たちは海に花火に驚いて手のひらですぐ楽器を作る
土門 蘭（文）/寺田 マユミ（絵）『100年後あなたもわたしもない日に』（京都文鳥社）	奪われた 心の一部は 今きみの もとで元気に やっていますか
土門 蘭（文）/寺田 マユミ（絵）『100年後あなたもわたしもない日に』（京都文鳥社）	コンビニで 今日いるものだけ買ってから 純度の高い 未来を生きる
土門 蘭（文）/寺田 マユミ（絵）『100年後あなたもわたしもない日に』（京都文鳥社）	君の吐く 言葉を固めて 船にして とどき舐める 悲しいときとか
土門 蘭（文）/寺田 マユミ（絵）『100年後あなたもわたしもない日に』（京都文鳥社）	どこまでも ひとりであるのは知っている 時々うっかり 忘れるだけで
土門 蘭（文）/寺田 マユミ（絵）『100年後あなたもわたしもない日に』（京都文鳥社）	液状の 夜にひたした両目から したたる星が きらきら光る
toron*『イマジナシオン』（書肆侃侃房）	会うまでの目をていねいに消してゆく手帳のなかに降りやまぬ雨
toron*『イマジナシオン』（書肆侃侃房）	おふたり様ですかとビースで告げられてビースで返す、世界が好きだ
toron*『イマジナシオン』（書肆侃侃房）	無言じゃなく余白と云えば帰るみち必然的にぼくら詩になる
toron*『イマジナシオン』（書肆侃侃房）	壊れると知っているのに投げつけてしまう。花瓶のような言葉を
toron*『イマジナシオン』（書肆侃侃房）	鯖味噌煮定食だったレシートが詩に変わりゆく古本のなか
toron*『イマジナシオン』（書肆侃侃房）	この部屋の暗さに顔を上げるまで旅をしていた四百頁
toron*『イマジナシオン』（書肆侃侃房）	きみの体温もいつしか疎ましくなるのだろうか猛暑日の夜
toron*『イマジナシオン』（書肆侃侃房）	おやすみも云わなくなったと気がついて 一泊遅れた淋しさがある
中家菜津子『うずく、まる』（書肆侃侃房）	ひとときは紅茶を淹れる読みかけの本はかめのかたたち伏せて
中家菜津子『うずく、まる』（書肆侃侃房）	星図鑑 葉がわりのクリップをはずせば文字が散らばっていく
中家菜津子『うずく、まる』（書肆侃侃房）	文字は鳥 ひらかれるまで永遠に白紙の空をばたいている
中家菜津子『うずく、まる』（書肆侃侃房）	金色の猫のまなことつながった誰も知らない月の裏側
中村森『太陽帆船』（KADOKAWA）	帆を掲げる 会いたい人に会いに行くそれはほとんど生きる決意だ
中村森『太陽帆船』（KADOKAWA）	別れても会えなくなっても見えずとも一度出会えばずっと 祝祭
中村森『太陽帆船』（KADOKAWA）	百年後、朝の海辺で待ってます。この約束を愛と言いたい
中村森『太陽帆船』（KADOKAWA）	天秤にあと少しだけ花びらが降ってきたなら変わる人生
中村森『太陽帆船』（KADOKAWA）	くす玉の中身のような感情が紐を引かれる、いつもあなたに
中村森『太陽帆船』（KADOKAWA）	感情の新たな器が透明で直ぐにわかったクリアな好意
中村森『太陽帆船』（KADOKAWA）	全部好きとかじゃなかった何一つ嫌えなかった、そういう辛さ
中村森『太陽帆船』（KADOKAWA）	言語化ができない好きを許したい 君だけずっとと無敵でいいよ
中村森『太陽帆船』（KADOKAWA）	好きという無秩序さなら知っていて喋り過ぎては話さ過ぎる
中村森『太陽帆船』（KADOKAWA）	好きな人が幸福である嬉しさよ全ての四季の花が香って
中村森『太陽帆船』（KADOKAWA）	性別でこれほどまでに軽々と愛とか恋に分けられてゆく
中村森『太陽帆船』（KADOKAWA）	フルムーン 好かれないこと落ち度ではないはずでしょう誰にとっても
中村森『太陽帆船』（KADOKAWA）	一度でも大切だった出来事は心を包む柔らかな皮膚
中村森『太陽帆船』（KADOKAWA）	何もかも難しいだけの今日でした。目にかかる髪ははらってあげたい
中村森『太陽帆船』（KADOKAWA）	本棚を捨ててしまった空白で一体何を手に入れたのか
中村森『太陽帆船』（KADOKAWA）	幾千の心があつた来世では詩集になってすれちがいたい
中村森『太陽帆船』（KADOKAWA）	君の声 凛々しい書体だったこと忘れずにいて本を読んでいる
永井祐『広い世界と2や8や7』（左右社）	どちらでもいいことを一つに選ぶ 昨日のことを今日考える
永井祐『広い世界と2や8や7』（左右社）	きみもいいやすくなるからぐちを言うなるべく面白くぐちを言う
永井祐『広い世界と2や8や7』（左右社）	雪の日のわたしの椅子の本の山 大きな猫みたいに座ってる
永井祐『広い世界と2や8や7』（左右社）	大きな猫をどかすために持ち上げて書籍の山を椅子からどかす
永井祐『広い世界と2や8や7』（左右社）	遠くにあるたのしいことの気配だけ押し寄せてきてねむれない夜
仁尾智『猫と写真と短歌と僕と』（ONDORI）	生まれくる猫に「ようこそ だいじょうぶだよ」と言える世でありますように
仁尾智『猫と写真と短歌と僕と』（ONDORI）	よく食べてよく遊ぶ猫 食欲は生きている証 生きていく意志
仁尾智『猫と写真と短歌と僕と』（ONDORI）	猫がいる 猫が元気である 猫が変なポーズでいる 幸せだ
西村曜『コンビニに生まれかわってしまっても』（書肆侃侃房）	死にたい、はいつか詩になる飛行機は飛行機雲を空に叩いてく
西村曜『コンビニに生まれかわってしまっても』（書肆侃侃房）	俺が俺に優しくなくてどうするの真冬の米はぬるま湯で研ぐ
西村曜『コンビニに生まれかわってしまっても』（書肆侃侃房）	こんな夜はココアに砂糖を入れてやる いまにいていう、苦しんでやる
西村曜『コンビニに生まれかわってしまっても』（書肆侃侃房）	もしもし、をぼしぼし、と言いかえて夜知り得る服りの孤独へコール
萩原慎一郎『歌集 滑走路』（KADOKAWA）	いつの日もきみの本心見えなくてジェットコースターの浮き沈みあり
萩原慎一郎『歌集 滑走路』（KADOKAWA）	脳裏には恋の記憶の部屋がありそこにあなたが暮らし始めた
萩原慎一郎『歌集 滑走路』（KADOKAWA）	ラブソングばかり家にて聴いている恋をしているからかもしれぬ
萩原慎一郎『歌集 滑走路』（KADOKAWA）	きみからのメールを待っているあいだ送信メール読み返したり
萩原慎一郎『歌集 滑走路』（KADOKAWA）	夕焼けをおつまみにして飲むビール一篇の詩となれこの孤独
萩原慎一郎『歌集 滑走路』（KADOKAWA）	君からのエールはつまり人生を走り続けるためのガソリン
萩原慎一郎『歌集 滑走路』（KADOKAWA）	消しゴムが丸くなるごとく苦労してきつと優しくなってゆくのだ
萩原慎一郎『歌集 滑走路』（KADOKAWA）	この街で今日もやりきれぬ感情を抱いているのはぼくだけじゃない
萩原慎一郎『歌集 滑走路』（KADOKAWA）	今日という日もまた 読みさしの人生という書物にすれば
萩原慎一郎『歌集 滑走路』（KADOKAWA）	図書館に行けば数十年後でも残る言葉があるのだろうか
萩原慎一郎『歌集 滑走路』（KADOKAWA）	日常の小さな達成集めては自信に変えてしまおう良夜

萩原慎一郎『歌集 滑走路』（KADOKAWA）	文学の湯にどっぷりと浸かりたき夜である 三日月
薄暮なつ『small tune,little view』（葉々社）	すべてに心を預けなくてもいいんだよ 過去も愛も銀テープにまみれて
薄暮なつ『small tune,little view』（葉々社）	配役のすべてに光は当たらずに創り出される闇のあたたか
薄暮なつ『small tune,little view』（葉々社）	輪っかになるように並べたぬいぐるみはじつこがきみしないように
薄暮なつ『small tune,little view』（葉々社）	呼ばれた、と思って本をひらくときわたしに流れる花びらがいちまい
薄暮なつ『small tune,little view』（葉々社）	読み終えてあなたが顔を上げるのを意図に朝が来るようにみた
薄暮なつ『small tune,little view』（葉々社）	図書館のだれもが星を持っていてページをめくるたび暮れしていく
薄暮なつ『small tune,little view』（葉々社）	本を読みながら遠くに聞いていてふいににぎやかで顔を上げる
薄暮なつ『small tune,little view』（葉々社）	この夜の救命ボートめく音楽ちいさな波で進んでいる
薄暮なつ『small tune,little view』（葉々社）	準備する夜っていいな あかるくて子どもたちは夜ふかしをはしゃいでて
薄暮なつ『small tune,little view』（葉々社）	「忘れない」と「覚えておく」ってちょっと違う 今日は覚えておく方の夜
橋爪志保『地上絵』（書肆侃侃房）	ここへ来て一緒に濡れてほしいのにあなたは傘をたくさんくれる
橋爪志保『地上絵』（書肆侃侃房）	たくさんのひとのまねしてつづく暮らし きびしいことがすこしはずかしい
橋爪志保『地上絵』（書肆侃侃房）	目に見えるものと見えないものがあるそのどちらにも惑わされたい
初谷むい『花は泡、そこにいたって会いたいよ』（書肆侃侃房）	光ってみたり終わってみたり生活は降るようにあるめざましが鳴る
初谷むい『花は泡、そこにいたって会いたいよ』（書肆侃侃房）	まいにちを食べて過ごして破裂せず何度もあしたになって いい子ね
初谷むい『花は泡、そこにいたって会いたいよ』（書肆侃侃房）	ふるえれば夜の裂けめのような月 あなたが特別にしたんだぜんぶ
初谷むい『笑っちゃうほど遠くって、光っちゃうほど近かった』（ナナロク社）	ああ鼓動が変えられてゆくこのことをだれかが音楽と呼んだのね
初谷むい『笑っちゃうほど遠くって、光っちゃうほど近かった』（ナナロク社）	あなたがあなたの名前を好きでいることが大きな湯飲みのように生きて
初谷むい『笑っちゃうほど遠くって、光っちゃうほど近かった』（ナナロク社）	会いたさは光の加減でかなしみやうれしさに変わるばかな宝石
初谷むい『笑っちゃうほど遠くって、光っちゃうほど近かった』（ナナロク社）	その花はどこにも咲いていないけどあなたは名前をつける好きになる
初谷むい『笑っちゃうほど遠くって、光っちゃうほど近かった』（ナナロク社）	道、は歩いてゆく地面のことで、わたしがゆくことそのものである
初谷むい『笑っちゃうほど遠くって、光っちゃうほど近かった』（ナナロク社）	いいことばかりを日記に書いて 日記を書くといいいことばかりの日々のようだ
初谷むい『笑っちゃうほど遠くって、光っちゃうほど近かった』（ナナロク社）	おなじ道があるいてちがうことを考えてときどきはおなじことを考えて
初谷むい『笑っちゃうほど遠くって、光っちゃうほど近かった』（ナナロク社）	水がお湯になるまで見ている時間のかんじで生きていけないらなあ はい
初谷むい『笑っちゃうほど遠くって、光っちゃうほど近かった』（ナナロク社）	空気がわたしのものになる感じがうれしくてきもちよい生きるのはキモい
初谷むい『笑っちゃうほど遠くって、光っちゃうほど近かった』（ナナロク社）	今日の月にも名前があつて こころってひとつじゃなくてもいいと思うよ
初谷むい『笑っちゃうほど遠くって、光っちゃうほど近かった』（ナナロク社）	シャワーのお湯がわたしのからだで合体しわたしは真夜中の川だった
東直子『春原さんのリコーダー』（筑摩書房）	おねがいねって渡されてこの鍵をわたしは失くしてしまう気がする
東直子『春原さんのリコーダー』（筑摩書房）	夜が明けてやはり淋しい春の野をふたり歩いてゆくはずでした
穂村弘『ラインマーカーズ』（小学館）	夜が宇宙とつながりやすいことをさしひいても途方にくらするわね
穂村弘『水中翼船炎上中』（講談社）	長靴をなくしてしまった猫ばかりきらつきらつと夜の隙間に
穂村弘『水中翼船炎上中』（講談社）	ぬいぐるみたちがなんだか変だよと囁いている引越しの夜
堀静香『みじかい曲』（左右社）	あの日々と括れば日々はまとまってそこからこぼれ落ちるいくつか
堀静香『みじかい曲』（左右社）	外すのをまだ迷いながらそのままにしている文庫のたまりない帯
堀静香『みじかい曲』（左右社）	生活を笑いたくない僕たちにたまに大きく降りてくる月
堀静香『みじかい曲』（左右社）	ベランダの植物をみな一室に集めてねむる風雨の夜を
柊野浩一『毎日のように手紙は来るけれどあなた以外の人からである 柊野浩一全短歌集』（左右社）	そうだった そういうところが好きだった 傷つけ合って別れた人の
柊野浩一『毎日のように手紙は来るけれどあなた以外の人からである 柊野浩一全短歌集』（左右社）	「好きでした」過去形ですねそうでするかそれでも伝えたいことでした？
柊野浩一『毎日のように手紙は来るけれどあなた以外の人からである 柊野浩一全短歌集』（左右社）	誕生日おめでとう きょうも好きでした あしたもきっと好きだと思う
柊野浩一『毎日のように手紙は来るけれどあなた以外の人からである 柊野浩一全短歌集』（左右社）	打ち切りになった漫画が好きだった私もきっと切られる側だ
柊野浩一『毎日のように手紙は来るけれどあなた以外の人からである 柊野浩一全短歌集』（左右社）	こんなにもふぶけたきょうがある以上どんなあすでもありうるだろう
柊野浩一『毎日のように手紙は来るけれどあなた以外の人からである 柊野浩一全短歌集』（左右社）	だれからも愛されないということの自由気ままを誇りつつ咲け
柊野浩一『毎日のように手紙は来るけれどあなた以外の人からである 柊野浩一全短歌集』（左右社）	気をつけていってらっしゃい 行きよりも明るい帰路になりますように
柊野浩一『毎日のように手紙は来るけれどあなた以外の人からである 柊野浩一全短歌集』（左右社）	色恋の成就しなさにくらべれば 仕事は終わる やりさえすれば
柊野浩一『毎日のように手紙は来るけれどあなた以外の人からである 柊野浩一全短歌集』（左右社）	くさくさとしているときは ぐさぐさとしたくなるから ぐくぐく寝ます
柊野浩一『毎日のように手紙は来るけれどあなた以外の人からである 柊野浩一全短歌集』（左右社）	だれからメールがたまに来るような よい一年でありますように
柊野浩一『毎日のように手紙は来るけれどあなた以外の人からである 柊野浩一全短歌集』（左右社）	ハッピーじゃないエンドでも面白い映画みたいに よい人生を
丸田洋渡『これからの友情』（ナナロク社）	恋の弾みで要らないことを口にしてびびりかのフリップ・ボンボール
丸田洋渡『これからの友情』（ナナロク社）	恋になるなら面白くない話だと思った途端 怒満だった 恋が
丸田洋渡『これからの友情』（ナナロク社）	好きだったこともそれだけだったことも思いだせる色鉛筆の缶
丸田洋渡『これからの友情』（ナナロク社）	自分という着ぐるみを着ているようで肌を掻く 眠れるまでずっと
丸田洋渡『これからの友情』（ナナロク社）	心は心がこもっている方へ傾く。こもっていると思えたい方へ。
丸田洋渡『これからの友情』（ナナロク社）	思い馳せ顔で入浴 生きるのが急激に楽しいときもある
丸田洋渡『これからの友情』（ナナロク社）	生きてるのに生きてるって感じた 夢を見ながら夢と気付きみたい
丸田洋渡『これからの友情』（ナナロク社）	この世には書かれていない詩の方が多い 空から落ちる水音
丸田洋渡『これからの友情』（ナナロク社）	図書館にならなかったらなりなさい 大変よ 検索されるのは
丸田洋渡『これからの友情』（ナナロク社）	カーテンが夜の揺れ方をしている あなたは幸せにしかなれない
水野葵以『ショート・ショート・ヘアー』（書肆侃侃房）	恋の病とはよく言ったものでして世界のほうかに会釈してくる
水野葵以『ショート・ショート・ヘアー』（書肆侃侃房）	ていねいな暮らしに飽きてしまったらブッチャップリンをブッチャップに
水野葵以『ショート・ショート・ヘアー』（書肆侃侃房）	本を読む君の鎖骨がふくらんでしむ 光に愛されている
水野葵以『ショート・ショート・ヘアー』（書肆侃侃房）	さっきのをプレイリストにしたよって 夜道も今夜だけ長くあれ
水野葵以『ショート・ショート・ヘアー』（書肆侃侃房）	僕のこと自慢に思う人がいて夜道がすごくすくく明るい
三田三郎『鬼と踊る』（左右社）	恋と愛とはぶん違うよ焼酎の芋と麦でもだいぶ違うし
三田三郎『鬼と踊る』（左右社）	肝臓よあなたのことが大好きですあなたが死ねば僕も死にます
三田三郎『鬼と踊る』（左右社）	僕の愛に対する債務不履行であなたの愛を差し押さえます
三田三郎『鬼と踊る』（左右社）	生活を組み立てたいが手元にはおがくずみたいなパーツしかない
三田三郎『鬼と踊る』（左右社）	胸張って歩いてみれば背骨から無理をするなとクレームが来る
三田三郎『鬼と踊る』（左右社）	焼酎が寄り添ってくれた 匿名の悪意ばかりが元気な夜に
三田三郎『鬼と踊る』（左右社）	心にも管理人のおじさんがいて水を撒いたり撒かなかったり
虫武一俊『羽虫群』（書肆侃侃房）	走りながら飲みます水ののみにくさ いつまでおれはおれなんだろう
虫武一俊『羽虫群』（書肆侃侃房）	ぐだり坂ばかりだったはずなのにのぼってきたみたいにくるしい
虫武一俊『羽虫群』（書肆侃侃房）	ああおれは言葉知らずのままで来て語尾に微笑をつけてしまふよ
安田茜『結晶質』（書肆侃侃房）	からだ持つかきりわたしのなかにあるくるしみ・月のひかり・痛み
安田茜『結晶質』（書肆侃侃房）	今日は雨 すでに興味を失ったものが灯りになるときもある
安田茜『結晶質』（書肆侃侃房）	点火するようにひとさし指で押す列をはみ出した詩集のひとつ
安田茜『結晶質』（書肆侃侃房）	知ってます雪に匂いがあることを 文庫にカバーかけて手渡す
安田茜『結晶質』（書肆侃侃房）	生き死ににないのは値札、新刊を置くためはずすのは旧いもの
安田茜『結晶質』（書肆侃侃房）	書架を木にたとえるならば森番になってみるから日の暮れまでを
安田茜『結晶質』（書肆侃侃房）	あかるさと暗さは同居しうるのであらしの晩にまた会いましょう
安田茜『結晶質』（書肆侃侃房）	夜を吸うようにたばこを吸うときの夜にさらなる墨足すこち
安田茜『結晶質』（書肆侃侃房）	月にまつわる歌をあつめたカセットを月のひかりに曝しておいた
山階基『風にあたる』（短歌研究社）	生活にわけはないのに共にするときは問われるきつかけなどを
山階基『風にあたる』（短歌研究社）	買い置きを牛乳をやや高いのに決めてひらく生活のすそ
山階基『風にあたる』（短歌研究社）	待つあいだ読んでいようと手に取ってめくり終わってしまう気がする
山階基『風にあたる』（短歌研究社）	ペン先のくずれるような夜に書く手紙は夜の切手をなめて

山階基『風にあたる』（短歌研究社）	常夜灯したたる橋よ明日も会うきみに手紙を書きたいような
山階基『風にあたる』（短歌研究社）	ないような夜と海とのあわいからちぎれる波に洗われていた
山階基『夜を着こなせたなら』（短歌研究社）	頬に雨あたりはじめる風のなか生きているのに慣れるのはいつ
山階基『夜を着こなせたなら』（短歌研究社）	貸した本だけは返しに来るというがらすのような律儀にふれる
山階基『夜を着こなせたなら』（短歌研究社）	コピー機のためにお金をくずしたら涼しい夜はおでんのがんも
山階基『夜を着こなせたなら』（短歌研究社）	音楽はひとりになると聴こえだす二度とは月に合わないピント
山階基『夜を着こなせたなら』（短歌研究社）	夜の底をさらえる風よ流星のスパンコールは胸にふるえて
山階基『夜を着こなせたなら』（短歌研究社）	さびしさを顔のなかば一点にささえて夜の小路へ入る
山中千瀬『死なない猫を継ぐ』（典々堂）	仰向けに本をひらけば落ちてくる無数のしおり代わりの半券
雪舟えま『たんぼるぼる』（短歌研究社）	すきですきで変形しそう帰り道いつもよりていねいに歩きぬ
雪舟えま『たんぼるぼる』（短歌研究社）	あなたがひとを好きになる理由はすき森がみぞれの色に透けてく
雪舟えま『たんぼるぼる』（短歌研究社）	逢えばくるうところ逢わなければくるうところ愛に友だちはいない
雪舟えま『たんぼるぼる』（短歌研究社）	だって好き 風にスカートめくられて心はひらくほかなきものを
雪舟えま『たんぼるぼる』（短歌研究社）	あるときはお酒に強くあるときは弱くてひとは自由なのです
雪舟えま『たんぼるぼる』（短歌研究社）	サイダーの気泡しらしら立ちのぼり静かに日々を讃えつづける
雪舟えま『たんぼるぼる』（短歌研究社）	なんにも挟まずに本を閉じている凄く怒ってる透きとおってる
雪舟えま『たんぼるぼる』（短歌研究社）	枕辺の本にしおりが二枚あり君はすすんでるほうのしおり
脇川飛鳥『ソーリーソーリー』（短歌研究社）	愛と時間とりそろえてます現品でどうか返品はご遠慮ください
脇川飛鳥『ソーリーソーリー』（短歌研究社）	あのときのあなたの言葉を守りたい光らなくても嘘になっても
脇川飛鳥『ソーリーソーリー』（短歌研究社）	何も考えず三秒で寝れる毎日はすごく貴重な一日なのかも
脇川飛鳥『ソーリーソーリー』（短歌研究社）	みんなが人とちがう人間になりたがっててみんなが人と同じ人間
脇川飛鳥『ソーリーソーリー』（短歌研究社）	私ったら考えたくもないやつのことキライキライと考えている
脇川飛鳥『ソーリーソーリー』（短歌研究社）	ちょっとだけうそつかないとそのままじゃ私がやさしくないのがばれる
脇川飛鳥『ソーリーソーリー』（短歌研究社）	ドアというドア窓という窓を開け風通しよくあかるく生きる
脇川飛鳥『ソーリーソーリー』（短歌研究社）	口に出せなかったことが集められて固まってできたのがわたし
脇川飛鳥『ソーリーソーリー』（短歌研究社）	お腹にあてた自分の手があったかくってずっと自分の味方でいたい
脇川飛鳥『ソーリーソーリー』（短歌研究社）	自分のことを言われているような気がしてつい本をハタッと閉じた気がする
脇川飛鳥『ソーリーソーリー』（短歌研究社）	本ばっかり読むんじゃないよいい感じのそば屋にいこう天ぷら食おう
脇川飛鳥『ソーリーソーリー』（短歌研究社）	世界はこんなだけど帰りの方向に月があるのはなんかいいよね
脇川飛鳥『ラストイヤー』（短歌研究社）	ドーナツは穴があいてるものですしあなたがいればうれしいですし
脇川飛鳥『ラストイヤー』（短歌研究社）	ワンダフルワールド！きょうも何人かのわたしのすきなひとが生きてる！
脇川飛鳥『ラストイヤー』（短歌研究社）	ふたりでただビールを飲んで脳みそがあったかかったあれはよかった

（五十音順、敬称略）